

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月15日現在

機関番号：36102

研究種目：基盤研究（A）

研究期間：2009～2011

課題番号：21251001

研究課題名（和文） タンロン皇城遺跡の保存活用に関する包括的調査研究

研究課題名（英文） A comprehensive study on conservation undertaken in the Thang Long Imperial Citadel

研究代表者

清水 真一（SHIMIZU SHINICHI）

徳島文理大学・文学部・教授

研究者番号：70359446

研究成果の概要（和文）：タンロン皇城遺跡の殿舎の配置構成を明らかにし、また建築上部構造の復原検討資料の悉皆的調査を行なった。さらに、遺構保存のための環境調査と木製遺物保存のための樹種と物性に関する基礎的データの分析や、地上に現存するフランス植民地建築を中心とする建造物群の現況調査などを行なった。これらの成果により、遺跡の学術的評価と保存管理計画策定に寄与し、遺跡の恒久的保存活用に向けて貢献した。

研究成果の概要（英文）：The historical and archaeological survey revealed the location of buildings which were placed in the central part of the imperial citadel. The architectural studies were conducted to understand its basic structure as an approach to reconstructing buildings. Besides, architectural survey for French colonial buildings around the central part of the imperial citadel was carried out for the master plan for the citadel. Environmental measurement to conserve the excavated site was conducted and basic analysis on excavated wooden artifact was done as a part of conservation scientific studies. These results were contributed for the academic value of the site, the making process of management plan for the imperial citadel, and the conservation treatment of the archaeological remains.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	9,300,000	2,790,000	12,090,000
2010年度	8,500,000	2,550,000	11,050,000
2011年度	7,000,000	2,100,000	9,100,000
年度			
年度			
総計	24,800,000	7,440,000	32,240,000

研究分野：文化財保存

科研費の分科・細目：人文学D・文化財科学

キーワード：国際研究者交流、ベトナム、都城遺跡、考古学、建築史、保存科学、歴史学、保存管理計画

1. 研究開始当初の背景

(1) タンロン皇城遺跡の保存に至る経緯

タンロン皇城遺跡は、ベトナムの首都ハノイの中心部、バーディン区に所在する。1010年に李公蘊が李朝（-1225）を樹立し、その

王城として築かれたのがタンロン（昇龍）城である。その後、陳朝（1225-1400）、黎朝（1428-1527）の各時代にもタンロンは王城の地であり続けた。また、19世紀初頭に成立した阮朝（1802-1945）は中部のフエを宮都

と定めたが、タンロンあらためハノイを副都とした。その後、フランス植民地時代に総督府が置かれたのもハノイであった。

このハノイ城塞は今日、その南北中軸線付近のごく一部が残存するにすぎないが、19世紀末にフランス駐留軍司令部が置かれ、その後、対米戦争期も含めてベトナム軍司令部が設置されたため、かえって市街化や大規模な開発を免れてきた。現存する建造物はフランス植民地期のものが大多数を占めるが、阮朝期の旗台、后楼、北門などに加え、主殿敬天殿の基壇と主入口である端門の基部は15世紀黎朝期以来のものでされている。歴史書の記述内容や部分的な発掘成果などから、古地図で知られる阮朝期のヴォーバン式城塞の範囲(約1km四方)は、李朝期以来の皇城域を概ね踏襲しているものと考えられてきた。

東はこの中枢域に隣接し、西はバーディン広場を挟んでホーチミン廟と対面するホアンジウ通り18番地は、南西角の一部にバーディン会堂(国会議事堂)が建ち、他の範囲は兵舎などが建ち並ぶ軍用地として近年まで使用されてきた。2010年のハノイ千年を記念して、この敷地全体を利用して新国会議事堂と国際会議場からなる複合施設を建設する計画が持ち上がった。そして、その事前発掘調査が開始された2002年、地中に大規模な建築関連遺構が広域にわたって重層的に遺存することが明らかになった。それらはタンロン皇城の宮殿跡の一部と判断され、ここに本格的発掘調査が開始されることとなり、政府の命により社会科学院考古学研究所がその任にあたることとなった。

発見された遺跡は、李朝成立以前の大羅期から阮朝期まで各時代の遺構・遺物が重層的に埋蔵されているが、遺構が最も明確に出土し、かつ建物構成や技法等に関する分析が進められているのは、李朝期とそれに続く陳朝期に属すると考えられる遺構群である。その主体をなすのは煉瓦造の基壇、排水溝、塀の基部、井戸、石造の柱礎、砂利や煉瓦片を突き固めた基礎地業といった木造建築に関する遺構である。また、掘立柱の基部なども埋められたままの状態で見つかる。個々の建物用途や区域の性格までは未だ明らかでないが、建築規模の大きさや発見された多彩な遺物の質の高さも含め、いずれにせよ皇宮の重要な一角を構成していたことは間違いない。発掘区の一部は調査後に埋め戻されたが、大半の範囲は仮設の素屋根で覆いながらその後も露出状態のままとされていた。

その後、紆余曲折の末、国会議事堂は当初計画より大きく規模を縮小しながらもほぼ旧来の敷地で建て替えられることとなった。そして、この建設用地を除く範囲は歴史公園と

して整備することが政府の方針として決定された。旗台から后楼付近までの区域は既に軍からハノイ市に移管され、今後移管が予定されているその南北の区域を含む皇城中軸区域全体がホアンジウ18番地遺跡とともに国家史跡に指定された。

(2)遺跡をめぐる日越協力

ベトナム政府による当初発掘範囲の遺跡保存決定を受けて、2004年にベトナム社会科学院は、今後の調査研究と保存の方向性を検討するため、日本から考古学、歴史学、建築学などの専門家からなる諮問団を招請した。現地調査後に提出された意見書では、出土した遺跡の重要性を高く評価する一方で、その研究や保存をめぐる多くの課題の存在が指摘された。同年に現地を視察した小泉首相は日本政府としてこの遺跡の調査研究と保存に協力することを表明し、両政府の合意をうけて2006年度には「タンロン遺跡に関する日越合同専門家委員会」が結成されるに至った。協力が合意された内容はきわめて多岐にわたるが、中でも緊急性が高いと判断された発掘遺構の評価・分析を中心に、文化庁や国際交流基金等の資金を得て専門家の派遣を行うと共に、現地における人材研修も実施してきた。2007年末には、外務省の草の根文化無償資金協力により、保存修復機材および測量機材が社会科学院考古学研究所に供与された。

2. 研究の目的

ベトナム政府は、発掘区域に中軸区を加えた範囲を法的な保護の対象とし、遺跡の価値に関する研究調査等を継続するとともに、遺構や遺物の万全な保存管理のための基盤づくりを目指してきた。本研究は、タンロン皇城遺跡の保存について、従前の支援で得られた成果を継承しつつ、包括的に考究するものである。

タンロン皇城遺跡は、アジアの都城遺構のなかでも、その中心域が重層的な形で出土した貴重な遺跡である。また、遺構は東南アジアに共通する高温多雨の気象条件下にあり、地下水を含む保存上の問題を抱えている。同時に、現在も首都となっている都市の中心部に位置するゆえに、緊急的な保存対策と長期的な都市開発計画とのバランスが求められている。

考古学、歴史学、建築学的、保存科学の各分野からの包括的な調査研究を通じて、今後の保存管理計画の策定と、タンロン皇城遺跡の恒久的な保存に寄与することを目的とした。

3. 研究の方法

(1)研究の内容は遺跡の保存を進める上で必

要不可欠であり、またベトナム側からの要請が強いテーマを中心に据えたものであり、発掘遺構の解釈、遺跡・遺物の保存、遺構の復元的検討と歴史的建造物群の調査、皇城の歴史、包括的保存管理計画への反映と多岐に及ぶ。考古学、保存科学、建築学、歴史学など様々な分野の専門家が参加しての学際的な体制で実施した。

(2)ベトナム側からはハノイ市人民委員会に直属するハノイ古城・コーロア遺跡保存センター（のちハノイ・タンロン遺産保存センターと改称）、発掘を担当したベトナム社会科学院考古学研究所（のち分離独立して同院ベトナム都城研究センター）、ハノイ国家大学、ベトナム林業大学等の協力を得て実施した。

なお、研究着手後、ユネスコ日本信託基金による「タンロン・ハノイ文化遺産群の保存事業」が2010年4月から開始されたことから、この事業との連携をはかりながら進めた。

4. 研究成果

(1)遺跡の解釈に関する研究

①皇城の歴史学的研究

タンロン王城の歴史学的な研究については、本研究着手以前から日越の研究者により進められていることから補足的な資料の収集を進めた。皇城遺跡の調査により殿舎の配置構成の一端が明らかになってきたことから、その成果を「大越史記」等の文献と結びつけて、殿舎の名称や機能などを明らかにしていくべき新たな段階に入っている。成果の一部をタンロン・ハノイ1000年記念国際学術シンポジウム等において発表した。

②遺構の解釈に関する調査研究

ホアンジウ18番地における発掘調査を継続するベトナム社会科学院考古学研究所に協力して遺構の精査を実施し、追加発掘の成果と合わせて、軒を接するように建つ李朝期から陳朝期にかけての殿舎配置の様相を明らかにすることができた。判明した建物の基礎構造と基準尺から、基壇遺構の復元CGも作成した。

③宮殿建築の復元的検討

発掘遺構からは、堅固な基礎事業を伴う礎石建ての建物で、柱間の広い巨大殿宇や八角形大型建物の存在が知られ、また、出土遺物から動物・獣、宝樹など数多くの棟飾りを備えた瓦屋根であったことが判る。建築の上部構造については依然手掛かりが乏しいが、出土土製品の検討などから斗拱を使用した可能性等、建物遺構が現存する黎朝期以降とは異なる様相が指摘された。

このため、李朝・陳朝期を中心にベトナム北部において数多くの出土例が知られる建築型土製品を主とする悉皆的な調査を実施した。建築型土製品等が実際の建築をどの程

度反映しているとみるか、また隣接する中国の建築様式との比較検討など、多くの検討課題は残されているが、殿舎上部構造を知る手がかりが得られた。調査の一部は「ベトナム北部出土建築型土製品等遺物資料台帳」として刊行した。

(2)遺跡の保存に関する研究

①遺構の保存

ベトナム側の要望が強い露出展示の可能性を含めた遺構の保存方法を検討するための基礎的作業として、気象観測装置による継続的な環境調査を実施した。遺跡現地に設置されている気象観測ステーションの観測データを回収・分析し、1年間にわたる微気象の変動状況を明らかにした。その成果は、“A Report on the Environmental Measurement Pertaining to the Conservation of the Thang Long Imperial Citadel (2008-2009)”として取りまとめた。2010年5月まで観測を継続したところで遺跡仮整備に伴って観測ステーションの移設を余儀なくされたため、移設後の観測・分析はユネスコ信託基金事業に委ねることとなった。年間を通じて高温多湿な気候特性とともに、周辺建物や樹木の影響といった局地的要因も指摘され、具体的遺構保存措置に関する今後の検討過程において有効に活用できるものと期待される。

遺跡保存・活用上、最も困難と予測される課題は出土遺構の露出展示であるが、これについては越側担当者と問題意識を共有するとともに、我が国におけるこれまでの経験を今後の検討に活かすため、同研究所およびハノイ古城・コーロア遺跡保存センター職員を招聘し、関西地域における先行事例の現地研究を共同で行った。併せて、遺跡整備の全体的方向性についても議論を重ねた。

②木製遺物の保存に関する調査研究

ホアンジウ18番地遺跡から出土した遺物のうち、特にベトナム側からの要望の強い木製品の保存処理方法に関する研究に着手した。保存処理のための基礎研究として、日本とは大きく異なるベトナム産木材の樹種同定とその物性分析に関する研究をベトナム林業大学および京都大学生存圏研究所の協力を得て実施した。

また、ベトナム側の既往研究に関する情報を共有するとともに、ベトナム林業大学および社会科学院考古研究所の専門家を日本に招聘し、国内の保存関係施設等の見学と併せて研究打合せを行った。

(3)建造物調査

ハノイ古城・コーロア遺跡保存センターと協力し、遺跡の中軸区内に現存するフランス植民地期の建築である旧インドシナ総督府

軍司令部施設を主な対象とし、現状記録、実測調査、および図化作業を行った。中区の建築群については既に遺跡の公開施設として使用されているものの、改修前の事前調査と価値評価が不十分であったことから再調査を行ったものであり、基礎資料として、「タンロン皇城中心区建造物群現状記録写真」を刊行した。

北区の施設はなお国軍施設として使用されていたために調査に制約はあったものの、近い将来の明け渡しが決定的なことから、今後の保存活用計画に資するための基礎的資料を得る目的で現状記録、実測調査、および図化作業を実施した。

(4) 保存管理計画に関する調査研究

前掲(1)～(3)の調査研究により得られた資料に加えて、ベトナムおよびハノイにおける文化財・都市計画関係の法令、上位計画、既存地図等の資料の収集整理を進め、また、遺跡保存管理のためのGISベースとして活用するための基礎的作業として、タンロン皇城遺跡の史跡指定範囲について1/500の既存地図のベクター化を行った。

2010年7月に世界遺産リストへの登録が承認され、ユネスコの要請に基づいて遺跡を管理しているハノイ市の機関であるタンロン遺産保存センターが主体となり、2012年3月完成を目指して保存管理計画の策定作業を進めていたことから、本研究で得られた成果を基に計画案作成への技術的助言を行った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 件)

[学会発表] (計 2 件)

- ① 上野邦一、Khao Sat Ban Do Hong Duc (「洪徳版図の考察」)、International Conference on Sustainable Development of Hanoi Capital - the Civilized, Heroic City for Peace、2010年10月8日、ハノイ国際会議場
- ② 上野邦一、宮殿の建物をイメージする、文化遺産国際セミナー「古代の都を考えるー奈良とハノイー」、2010年1月30日、奈良県新公会堂

[図書] (計 4 件)

- ① 清水真一・友田正彦・高妻洋成・井上和人・青木繁夫・桃木至朗・上野邦一・田代亜紀子・石崎武志・宇野朋子・大田省一・小野田恵・大山亜紀子・宇都光恵、タンロン皇城遺跡の保存活用に関する包括的調査研究、

徳島文理大学、2012年、178頁

- ② 清水真一・友田正彦・小野田恵・宇都光恵、ベトナム北部出土建築型土製品等遺物資料台帳、徳島文理大学、2012年、210頁
- ③ 清水真一・友田正彦、タンロン皇城中心区建造物群現況記録写真、東京文化財研究所文化遺産国際協力センター、2010年、109頁
- ④ 宇野朋子、A Report on the Environmental Measurement Pertaining to the Conservation of the Thang Long Imperial Citadel (2008-2009)、東京文化財研究所文化遺産国際協力センター、2010年、48頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

清水 真一 (SHIMIZU SHINICHI)
徳島文理大学・文学部文化財学科・教授
研究者番号：70359446

(2) 研究分担者

友田 正彦 (TOMODA MASAHIKO)
東京文化財研究所・文化遺産国際協力センター・保存計画研究室長
研究者番号：70392553
高妻 洋成 (KOHDZUMA YOHSEI)
奈良文化財研究所・埋蔵文化財センター・保存修復科学研究室長
研究者番号：80234699

(3) 連携研究者

井上 和人 (INOUE KAZUTO)
奈良文化財研究所・副所長
研究者番号：60110087
青木 繁夫 (AOKI SHIGEO)
サイバー大学世界遺産学部・教授
研究者番号：60088797
桃木 至朗 (MOMOKI SHIROU)
大阪大学大学院文学研究科・教授
研究者番号：40182183
上野 邦一 (UENO KUNIKAZU)
奈良女子大学古代学学術研究センター・特任教授
研究者番号：70000495
田代 亜紀子 (TASHIRO AKIKO)
奈良文化財研究所企画調整部・特別研究員
研究者番号：50443148